

学生による OHP プレゼンテーションを取り入れた 大学授業の改善

須曾野仁志*・下村 勉*・織田 揮準**

大学授業において、学生によるプレゼンテーション活動を取り入れ、授業の改善を試みた。本研究では、須曾野が担当する3つの授業において、学生が「未来の教室 2020 プロジェクト」に関わり、約20年後にどのような学習環境や学習機器が実現されているか考え、OHPを用いてプレゼンテーションした。この協同での学習活動を実践した結果、学生が図や絵などを用いてわかりやすい情報表現に努めたり、授業内容と関わった知識や学習意欲を向上させたことが明らかになった。

キーワード: OHP、プレゼンテーション、授業改善、大学授業、協同学習

1. はじめに

大学の授業について、問題点として指摘されることに、学生の学力・学習意欲の低下、授業中の私語・睡眠、授業中での携帯メールのやりとり等が挙げられる。学生が受け身的になりがちな大学の授業を改善するにはどうしたらよいであろうか。

我が国では、1991年に大学審議会の答申が出され、大学設置基準が改訂されてから、全国の大学において、教育・研究に関する自己点検や自己評価が行われ、制度や組織面の改革が進められてきた。また、近年、学生による授業評価を導入・実施する大学も増えてきた。しかし、それらの実施結果や得られた成果が大学教育において十分活かされているとは言い難い。また、大学教育の日々の営みである授業については、体系的な研究や組織的な研修活動は十分行われていないのが現状である。特に、授業における教授学習過程に関わった実践研究は数少なく、高等教育ではこれからの課題である¹⁾。

「良い授業とは教師と学生が協同で創りあげていくもの」であり、授業担当者(教師)は学生が積極的に授業に参加できるような授業の工

夫をすることが重要である。そして、学生自身が自分の学びの過程や学ぶことの意味などを自主的にとらえ、学んだ成果を自己評価したり、学生相互に適切に評価することが大切である。このようなボトムアップ的なアプローチが大学授業の改善において必要である。

本研究では、大学の授業において、学生によるプレゼンテーション活動を取り入れ、授業の改善を試みた。これまで、授業担当者が一斉指導型の授業でプレゼンテーションを工夫した授業実践の報告はいくつかあるが²⁾³⁾、学生自身にプレゼンテーションにとり組ませて授業を改善した例はほとんどない。

この数年、「パワーポイント」(プレゼンテーションソフト)を用いて、教員が授業の中で情報提示をしたり、学生がゼミや卒論発表会等でプレゼンテーションする機会が増えているが、本研究では、少人数の教室においても、100人を超す大教室においても、手軽に情報提示が可能なOHP(オーバーヘッドプロジェクタ)を利用し、プレゼンテーションをさせるため、授業時間内に、グループでのディスカッションを取り入れたり、学生に手書きのOHPシート(TPシート)を作成させた。そのような準備を進めてから、プレゼンテーション大会を開き、学生同士の交流・評価活動を行った。

本研究では、学生がこのような活動を取り組

* 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

** 三重大学教育学部教育心理学教室

む中で、

- ・プレゼンテーションにとり組むことで、学生が学べることは何か。授業の内容に関わった知識・技能を習得したり、関心・意欲・態度が向上するようになるか
- ・学生による OHP プレゼンテーションに取り入れることで授業がどのように改善されるか、また、その中で、授業担当者がどのような支援をする必要があるか

を明らかにすることが研究の目的である。

2. 大学における授業改善

「大学の授業では学生が発表する機会は少なく、ほとんどは教官の方々が話されているのを一方的に聴く形式です。」(三重大学人文学部学生 HY)

これは、須曾野が担当する授業で、学生が大学授業について書いたコメントである。この学生が指摘するように、我が国で大学教育を受けた人の多くは、「授業担当者から学生へ知識を授ける一方通行の大学授業」をイメージするのではないだろうか。また、「授業内容が理解できないのは学生の努力が足りないから」「大学の授業についていけないのは学生の学力低下が問題」と考えられ、授業内容・方法が評価されることは少なく、我が国の大学の授業は、長い間「聖域」とも考えられてきた。

しかしながら、我が国の大学においても、学生による授業評価が導入されたり、授業担当者自身の「自分の授業をよりよくしたい」という思いから、近年、授業担当者が大学授業の改善を進めたり、組織的にファカルティデベロップメント (FD) に取り組む大学も増えてきている。

筆者らは、三重大学教育学部の授業において、学生側から授業内容に関する意見・質問・要望などを求めたり、学生とのコミュニケーションをはかるために「大福帳」を取り入れ、授業改善に取り組んできた^{4) 5)}。「大福帳」は、織田が考案した A4 サイズの厚紙のカードで、授業の感想・提案欄と授業担当者の記入欄が印刷され

ている。このカードを用いて、学生側からの授業改善に関する情報や学生の提案が次回の授業に活かされることを学生が実感すれば、授業への関心はより高まっていく。授業評価の調査から、織田や須曾野が担当した授業において、「大福帳」の導入は学生側から好意的に評価された。

筆者らが「大福帳」を用いた授業改善に長年努めた結果、学生参加型の授業をさらに実践するには、次のような点に留意し、授業展開を考えていくことが重要となった。

- ・授業担当者が「教授する」という考え方で授業を展開するだけでなく、「学習支援する」という発想を重視し、学生が授業に参加できる時間を増やす。
- ・授業の中で、学生相互のコミュニケーション・評価活動を取り入れる。
- ・授業の中で、学生が発表したり、議論する場面を増やす。
- ・学生が数人のグループに分かれて、その中で協同での学習を進める。

現在、我が国の大学で行われている授業改善は、多様なメディアを用いたり、授業評価を活かしたりするもので、一斉指導型授業の中で授業担当者のスキルを向上させることをねらいとしたものがほとんどである。

本研究では、授業担当者のスキルではなく、学生の学び方のスキルを育成することに重点を置いた。その中でも、特に、授業の中でのプレゼンテーションに注目し、学生自らが OHP を用いたプレゼンテーション活動を授業の中で取り入れ、授業改善に努めた。

3. 学生によるプレゼンテーション

3.1. 学校教育におけるプレゼンテーションの現状

これまでの学校教育の中で、OHP がどれだけ利用されているかについて、4 章以降で述べる授業実践を行った際、受講学生に調査した。その結果が図 1 である。「これまで小学校から

高等学校の授業の中で担当教師はよく OHP を使ってくれたか」という質問に対して、肯定的に（「はい」「ややはい」）返答したのは 14.7% であり、61.2% が否定的に（「いいえ」「ややいいえ」）答えている。須曾野は公立中学校での教職経験があるが、その経験からも、小・中・高校の授業では、一部の視聴覚教育に熱心な教員が OHP を使っているだけで、OHP が埃を被って放置されているのが現状である。また、調査で「これまで小学校から高等学校の時代に自分自身が OHP を用いて発表したことがあるか」という質問にも「ない」「ほとんどない」と否定的に返答した学生が 72.1% となった。

大学においても、OHP やビデオプロジェクタなどの情報提示機器を用いて授業を展開する教員は限られている。一斉指導型の多人数の授業では、学生が質問をしたり、発表を取り入れることは難しい。少数の学生で構成されるセミナーや演習などの授業やゼミなどでは、学生が輪番等で発表する機会が設けられることがあるが、その際、発表するレポート資料（レジメ）を作成・配布し、それを読んでいく形式が多い。最近では、プレゼンテーションソフト「パワーポイント」を利用し、学生がゼミや卒業研究の発表会等でプレゼンテーションを行うところが増えてはきているが、理工系の学生などまだ一部の学生に限られている。

3.2. OHP を用いた学習者によるプレゼンテーション

須曾野は、公立中学校在職時に、教科の授業や文化祭でのクラス発表の際、生徒に OHP を利用して発表させた実践を重ねてきた。教科の授業では、例えば、数学の方程式の解き方で答え合わせをする際、生徒が解答だけでなく、途中の式の変形をシートに書いたり、別の解き方を提示することができた。また、数学の応用問題（文章問題）をどのように考えたか発表するのに、OHP が役立った。文化祭でのクラス発表では、従来、B0 サイズの模造紙が用いられていたが、広い体育館でプレゼンテーションするには、模造紙の文字や図が小さく、遠くから見にくいので、須曾野は生徒に OHP を利用させることにした。OHP を用いたクラス発表にとり組ませたところ、生徒は次に示す点で OHP のメリットを感じたようである。

- 発表に必要な情報を大きく提示できる
- OHP シートに絵や図を多用して、聴衆を引きつけられる
- OHP シートの作成を、グループの中で分担して取り組める
- 作成した OHP シートを保存しやすい

他に、中学校において、生徒にプレゼンテーションを取り入れた実践に、木谷・下村による実践研究がある⁶⁾。その中学校技術科における

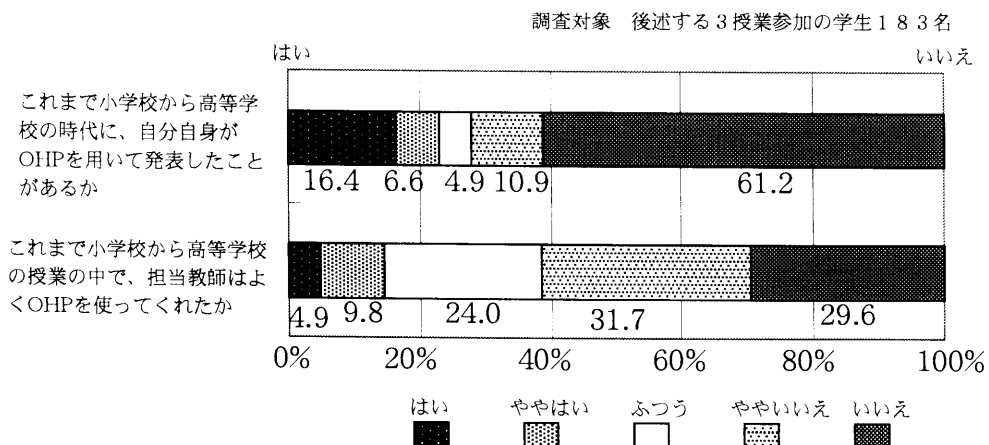


図 1 学校教育の中での OHP 利用 調査結果

実践では、技術科で学ぶ内容に関わったテーマが設定され、生徒がテーマに沿ったアイデアを創造し、プレゼンテーションする活動が行われた。OHPを用いてプレゼンテーションし、学習者集団からフィードバックを受けることにより、アイデアの質を向上させ、かつ学習者集団が学習成果を共有していく授業にとり組んだ。

3.3. 大学授業における OHP を用いたプレゼンテーションで期待される効果

大学授業において、須曾野は中学校での実践と同様に、OHP シートにその場で手書きさせ、発表資料を準備させたり、OHP で自分の考えを説明させるとり組みを進めてきた。ただし、自分の考えを紹介させるのは、自発的意志を示した者やくじ引きで当てられた一部の学生に限られた。

大学の授業を改善していくには、木谷らが実践してきたように、授業に参加する全学生に OHP シートを作成させ、プレゼンテーションにとり組ませ、参加者集団からフィードバックを受け、さらに学習内容に対して考えたり深める活動が重要であると考えた。

「パワーポイント」ではなく、OHP にこだわったのは、現段階では、大人数での授業では 1 人 1 台のパソコンを準備することが難しいが、OHP によるプレゼンテーションは、小クラスから大人数での教室でも、OHP が教室に 1 台あれば学生にプレゼンテーションを体験させられるからである。また、将来、学生が「パワーポイント」が使えるようになって、OHP シートの作成が作成することが「パワーポイント」のスライドを制作する上でも基礎となるだろう。

学生による OHP プレゼンテーションを取り入れることで、学生側に期待される効果は次のような点が予想される。

- ・学生が与えられたテーマに対して、自分で詳しく調べ、考えていることをまとめる。
- ・学生が手書きで OHP シートの上に、文字や図・絵をいかにレイアウトするか。いかにわかりやすくシートを作成するか
- ・わかりやすく発表するために、OHP シート

を作成したり、口頭発表の原稿を準備する。

- ・とり組んでいる内容について、知識が身に付いたり、深まったりする。
 - ・OHP シートを用いて、プレゼンテーションすることで発表が行いやすくなる。
 - ・自分一人で調べたり考えてもわかりにくい場合は、授業参加の学生同士で尋ねたり、議論し、グループでの学習が進む。
 - ・OHP シートを用いた発表は、大学卒業後、仕事に就いたときにプレゼンテーションの仕方として活かせる。
- そして、授業担当者がこの学習を展開する上で、考慮すべき点は次のとおりである。
- ・授業に参加する人数からどのように授業展開するか。
 - ・発表時間や発表準備のための時間をどのように設定するか。
 - ・学生に個人でプレゼンテーションにとり組むか、それともグループでとり組ませるか。

4. 「未来の教室 2020 プロジェクト」での学生による OHP プレゼンテーションの授業

須曾野が担当する大学授業において、学生が OHP を用いたプレゼンテーションする活動を次のとおり実践した。

・プレゼンテーションにとり組むテーマ

「未来の教室 2020」

西暦 2020 年になったら、どのような教育（学習）機器が使われたり、どのような教室環境が実現されているか考えを考え、その時代に実現される学習についてプレゼンテーションする。授業に参加する学生のほとんどは 20 歳前後の年齢であり、自分が年齢の倍生きた年代に、あるいは、自分の子どもが小中学校に通っている時代となるので、自分の子どもにどんな学習環境を実現させたいかを考えさせた。「未来の教室 2020 プロジェクト」と名付けた。

・対象授業

対象とした授業は次の 3 クラスである。

ア、「教育情報科学Ⅱ」

三重大学教育学部情報教育課程学生対象

受講生 12 名

イ.「視聴覚教育」

三重大学人文学部学芸員資格を取得したい学生対象

受講生 34 名

ウ.「教育の方法・技術」

皇學館大學文学部教育学科学生対象

受講生 140 名

3つの授業とも、教育・情報機器いかに教育・学習利用するかという点を学ぶ、ということを取り上げている。

・とり組む方法・時間

「教育情報科学Ⅱ」では、学生1人にプレゼンテーションにとり組ませたが、「視聴覚教育」では学生2〜3人で、「教育の方法・技術」では学生4〜6人のグループでとり組ませた。

プレゼンテーションを準備するのに、1コマ(90分)の時間を確保し、個人やグループがプレゼンテーションするのに、1〜2コマ分の時間を使った(授業によって異なる)。また、それぞれの発表グループに与えられた時間は、2〜3分程度とした。

・OHP シートの作成、プレゼンテーションの準備

それぞれの授業で、OHP シート作成をするために、学生に用意させたのは、油性のサインペンと透明な OHP 用シートである。OHP 手書き用として市販されている透明シートは1枚20円程度で入手できるが、学生にはそれができるだけ使わずに、生活の中で OHP シートとして活用できるものをなどを探そうに指示した。その結果、学生はパンフレットを入れる袋、家庭用のゴミ袋、クリアファイルの透明の袋などを A4 サイズに切って、有効に利用した。

プレゼンテーションを準備する1コマ(90分)の時間では、学生は、まず初めに、2020年にどんな教室が実現されたり、どんな学習ができるようになっていくか考える必要があった。グループでとり組んだイとウの授業では、グループ内で個人が考えたことを交流し、グループのアイデアとして、どのようなことを取り上げる



写真1 プレゼンテーション準備の様子

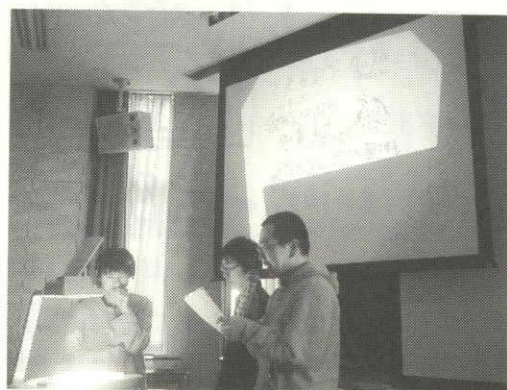


写真2 グループによるプレゼンテーション

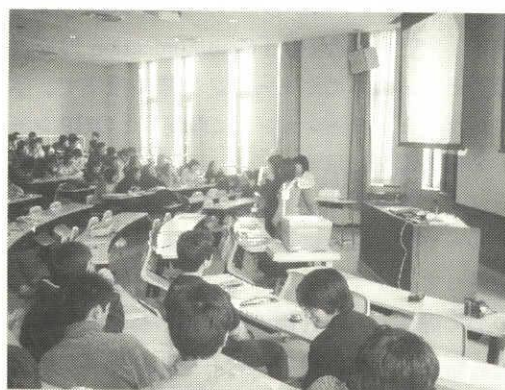


写真3 大教室でのプレゼンテーション大会の様子

かディスカッションし、発表内容や OHP シートを協同で作成しなければならなかった。写真1は、授業中、プレゼンテーションの発表準備をしている様子である。

・授業でのプレゼンテーション大会

授業で、発表順を決め、OHP を用いたプレ

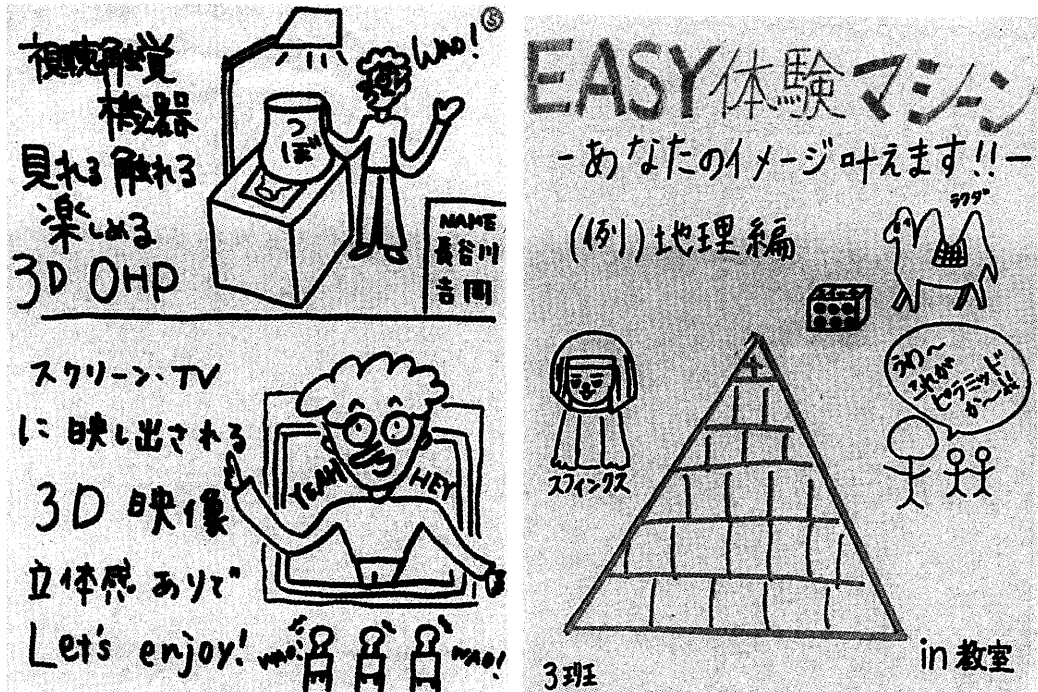



図2 学生が作成した OHP シート例

ゼンテーション大会を実施した（写真2、3）。学生が取り上げた内容としては、「バーチャル体験のできる教室」「2020年 ドラえもんが僕らの教室にやってくる!!」「プチ未来のイスと机」「見て触って動かして……、実体験できる映像」「空飛ぶ教室」「Communication 円形授業」といったものがあった。実際の授業で、学生がプレゼンテーション用に作成した OHP シートの例を図2に示す。

プレゼンテーション大会では、各個人またはグループで、図3に示す「ありがとうカード」を使って、アイデア、内容、発表の仕方などについて評価した。評価の欄には、「◎とてもよい、○よい、△改善が必要」を記入させた。また、コメント欄には、「ありがとうカード」の名にふさわしいように、発表者に対し、お礼の気持ちをこめて感想や改善点などを書かせた。

OHP シートの作成から、授業でのプレゼンテーションにとり組んだ学生の授業感想を表1に示す。

No. ☐ ありがとうカード 

さんへ () より

アイデア ☐ 学習楽しさ ☐

発表の仕方 ☐ 研究性 ☐

◎ ○ △ で

ひとことコメント（改善も含めて）

図3 「ありがとうカード」

番号	題名	作成者	修正日
14	バーチャルマスクとグローブ	大森・坪地	2002.1.28
11	説明めたいな	中辻・田畑	2001.12.21
9	いつでもどこでもモニター	池澤・湯元	2001.12.17
13	映画を撮って授業1	佐	2001.12.17
8	モバイル教科書	大村・森井	2001.12.16
7	バーチャル先生	バーチャル学生	2001.12.14
1	立待講像データ	A.T.W	2001.12.14
3	見て読んで動かして・・・、英単語でできる授業	西野・前田	2001.12.11
5	Dreams Come True 17	長谷川・吉岡	2001.12.10
6	おいしそうなお料理実習	天野・横田・北村	2001.12.10
10	立待講像での学習	鈴木直夫・佐藤大一・中井厚仁	2001.12.10
2	自宅からモグリ	中尾・平松	2001.12.7
4	英語実習	菅古・竹内・藤	2001.12.7
12	未来通信教育	藤井・森	2001.12.7

図4 OHP シートと説明を入れた Web ページ例

表1 OHP を用いたプレゼンテーション授業にとり組んだ学生の感想

・大学の講義はほとんど黒板を写したり、先生がおっしゃったことをノートにとっているといった感じで、自分たちで何かを考えて発表するという機会があまりないように思います。それに対して、プレゼンテーションを取り入れた授業は、人まかせではなく、自分の意見を出し、友達と意見交換をして1つのものを作り、発表して他の人に伝えることができるので、その過程の中でディスカッションやコミュニケーションがきちんととれるので、とても意味のあることだと思います。また、発表は聞き手の反応を見ながら進めていくので、その過程でもコミュニケーションがとれるものだと思います。(KY)

プレゼンテーションの授業は、大学生にとっては、人前に出て話したりする時間が少ない分良いことだと思うし、良い経験だと思う。

小学校→中学校→高校と年齢が大きくなるにつれて、自ら発表しようという人（授業中に手を挙げて発表する人）は少なくなっていくと思う。だから、学習するに当たって、どんな年代においても、プレゼンテーションを導入した授業はやっぱり必要だと思います。

自分たちの意見をまとめたり他の人がその意見を聞いているか言葉で言うだけじゃ物足りない部分は、OHP とかをを使用して絵を描いたりすることによって、より伝わりやすくなると思う。機器を使ったりするのも良い経験だと思う。(TR)

プレゼンテーションをすることにより、より一層授業の内容が濃くなり、ふつうの授業なら先生対生徒という固まった形だけの授業だからやはり生徒的には先生の話の聞くと言った授業姿勢になり、退屈を感じたりします。プレゼンテーションがあると自分の考えを他の人に聞いてもらえることもできるし、逆に他の人の意見を聞いて学ぶこともでき、その人その人の個性が出たりするので面白い場面もあって、より充実感がもてる授業になると思うので、取り入れていく方が生徒のやる気を引き出せることにつながりとてもいいと思います。生徒の中には自分の意見を発表できない子もいるから他の人とのコミュニケーションの中で、ふとみんなと混ざって出したりして、たとえ目立たなくても自分の意見が少しでも取り入れられることによって自信や進歩につながるがあると思うので、クラスみんなの意見が聞きたいときとかにプレゼンテーションを取り入れるとみんなが平等の形として出てこれると思うからどんどん取り入れていく方が良いと思います。(IE)

・学習成果の発信・公開

学生が授業でプレゼンテーション用に作成したOHPシートは、イメージスキャナで画像として取り込み、Web ページ化した。そのシートの画像だけでは不十分であるので、授業アでは説明を Web ページとして作らせたり、イとウの授業では、自宅などから Web データベースにアクセスして説明が登録できるようにした(図4)。

5. 本実践に対する考察

5.1. プレゼンテーション活動にとり組んだ学生の学習成果

参加学生の授業感想から、学生がプレゼンテーションにとり組む上で、発表の準備段階や発表を体験した時点での学習活動の利点として挙げられたことをまとめると次のようになる。

授業でプレゼンテーションの準備をしたり、発表を体験する上での利点

- ・自分の言いたいことを他の人に聞いてもらうにはどうしたらよいか考える。
- ・グループ内や隣の人と話し合い、発表内容やOHPシートの作成について考えることができる。
- ・自分の考えを頭でまとめ、相手により分かりやすく伝えようとする力を養える。
- ・発表の仕方がわかる

「分かりやすく伝えようとする力」と関わり、授業担当者が特に留意したのは、発表をする際、学生に適切なOHPシートを作成させることであった。それについて調査したところ、他の人(たち)が作成したOHPシートが「見やすいものであったか」「文字の大きさや使用数は適切なものであったか」

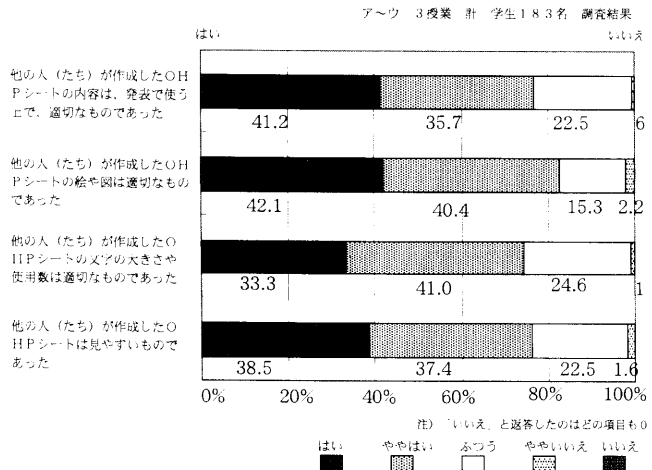


図5 学生が作成したOHPシートに対する評価

「プレゼンテーションに、個人(1人)よりグループ(2～3人)でとり組んだ方がよいか」

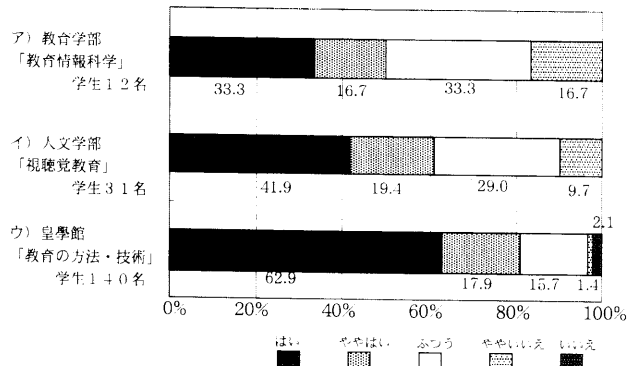


図6 プレゼンテーションのとり組み方

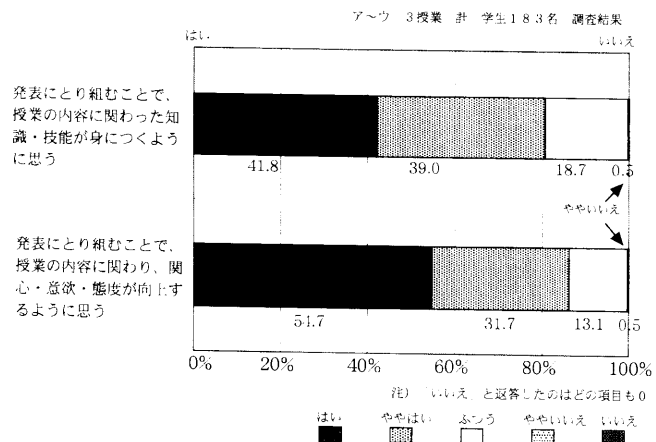


図7 発表にとり組んだ結果

のであったか」「絵や図は適切なものであったか」「シートの内容は、発表で使う上で、適切なものであったか」と質問に対して、図5に示す結果となった。どの質問に対しても、4分の3以上の学生がシートが適切なものであったと回答した。学生が発表活動に実際にとり組んでの満足度についても、「自分（たち）の口頭での発表はうまくできたか」という調査に対し、51.4%が肯定的に返答し、15.8%が否定的であった。「他の人（たち）の口頭での発表はうまくできたか」については、81.4%が肯定的に返答し、否定的な返答はほとんどなかった。授業担当者からみても、OHPシートに聴衆を引きつける図や絵を多用したり、OHPシートも重ね合わせやマスキング法を効果的に使った発表が多く、プレゼンテーションの内容及び方法とも、合格点以上を獲得する個人またはグループがほとんどであった。

「プレゼンテーションに、個人でとり組んだ方がよい、グループでとり組んだ方がよい」ということに、3クラスごとに分け、調査結果を示したものが図6である。実際の授業では、Aは個人で、イとウは、グループでプレゼンテーションにとり組ませたが、学生は3クラスとも「個人よりグループでとり組んだ方がよい」と考えていることが明らかになった。

グループでプレゼンテーションにとり組んだ場合、学生は次のような利点を挙げている。

グループでとり組む利点

- ・発表内容について、グループ内でディスカッションができる。
- ・グループで協力してとりくむことができる。
- ・グループで考えて1つの物を作ることはすごく楽しいし、やりがいを感じる。
- ・グループで話し合うことのメリットの1つは、他の人のアイデアを聞けてそれをみんなでふくらませていくことの楽しさである。

次に、発表を視聴する上での学生が感じた利点をまとめると以下ようになる。

仲間の発表を視聴する上での利点

- ・教える側だけでなく、学習者側の意見や考えを知る機会になる。

- ・人の意見を聞くことで発見があったり、考え方が変わることがある。相手の立場に立ってものを見るということにもなる。

また、発表会では、「ありがとうカード」を用いて他の人の発表を評価をしたり、コメントを書く活動を取り入れたが、このことについて、『ありがとうカード』で評価やコメントが返ってくるとよい」と返答した学生は91.2%であり、「他の人からの評価は妥当なものであったか」「他の人からのコメントは妥当・適切なものであったか」という質問には、それぞれ67.8%、71.6%が肯定的に返答し、否定的に返答した者はほとんどいなかった。学生の感想にも「コメントが返ってくるのはうれしいし、自分たちの考えに偏らないので、いいと思った。」とあったが、仲間からの評価・コメントは、とり組みを進めていく上で非常に参考になり、他の人たちの発表を聴くのは、自分の発表を向上させることにつながっている。

5.2. プレゼンテーション活動を取り入れた授業の改善と学習支援

プレゼンテーションにとり組むことで、「授業の内容に関わった知識・技能が身についたか」「授業の内容に関わり、関心・意欲・態度が向上したか」という質問では、いずれも80%を超える学生が肯定的に返答した（図7）。また、「このような活動を授業でとり組むことは、授業をよりよくすることにつながるか」という質問には、92%が「はい」「ややはい」と返答した。授業内容に関わって、知識・技能を習得させたり、関心・意欲・態度を向上させるプレゼンテーション活動を進めるには、次に示すことが重要である。

- ・学生が創造しやすいプレゼンテーションのテーマを設定する
- ・受講者全員にプレゼンテーションにとり組ませる
- ・個人でとり組む場合であっても、学生仲間同士で発表内容についてディスカッションすることを推奨する

本研究で実践してきた学生によるプレゼンター

ション活動を、授業の改善という点で、実践結果をまとめてみると、

- ・授業担当者からの一方通行の話ではなく、参加学生の双方向のやりとりが可能となる
- ・学生がテーマに沿って、ものをより深く考え、限られた時間内に調べ学習にとり組む
- ・「教師が授業をする」というより、「受講学生が授業を作る」という授業への参加意識を向上させることにつながる
- ・数人での協同学習が実現され、学生が仲間と共に学び合える
- ・全員の学生が発表にとり組んでいるので、他の人がどんな内容について、どんな方法で発表するか、興味を示す。

といった点が挙げられる。

次に、学生がプレゼンテーションにとり組む活動を取り入れた授業において、授業担当者がどのような点に留意し、学習支援を進めるか、整理すると以下ようになる。

- ・グループでとり組ませる場合、何人で活動を行うのが最適かに留意する
- ・教室によっては、机と椅子が固定されているため、グループ内の話し合いがやりにくい、ディスカッションができるように座る場所などを工夫する。
- ・発表時間や準備時間をどのくらいとるか検討する
- ・学生同士が質問・相談しやすい雰囲気作りをしていく
- ・「ありがとうカード」に書く評価やコメントに責任を持たせる。

6. おわりに

学生が「未来の教室 2020」プロジェクトにとり組んできた学習成果（OHP シート、説明など）は、学生の許可を得て、Web ページ化した。このように、大学外にむけて学習成果を情報発信することは、「自分たちのとり組んだ発表内容を友達など多くの人々に見てもらいた

い」と学生もやりがいを感じている。18 年後の 2020 年まで、この Web ページを見ることができるようにし、学習成果を保存・公開していきたいと考えている。

OHP シートと「パワーポイント」を比べてみると、学生が自分（たち）の個性を発揮したり、協働での作業を進めやすいのが OHP シートの方でないか、と考えられる。この点について、今後、実践を進める中でデータをもとに明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 1) 伊藤秀子「より良い授業実践と研究をめざして」伊藤秀子・大塚雄作編『ガイドブック 大学授業の改善』有斐閣、1999、5
- 2) 野々山隆幸「プレゼンテーションツールの利用」伊藤秀子・大塚雄作編『ガイドブック 大学授業の改善』有斐閣 p124-129、1999、5
- 3) 大倉孝昭「プレゼンを用いた授業改善の研究」日本教育工学会第 17 回大会講演論文集 p231-232、2001、11
- 4) 織田揮準「学生のフィードバック情報を取り入れた授業実践」放送教育開発センター研究報告 83 p5-17、1995
- 5) 須曾野仁志「『大福帳』を取り入れた『教育情報処理』の授業実践と授業評価の試み」メディア教育開発センター研究報告第 07 号、1999、3
- 6) 木谷康司・下村 勉「学習者のアイデアプレゼンテーションを中心とした技術科授業の設計と評価」三重大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要 15 号、p151-158、1995、3